

審査員

小説部門

武蔵野大学名誉教授

三田 誠広、宮川 健郎

武蔵野大学教授

土屋 忍

俳句部門

俳人

井上弘美

武蔵野大学教授

三浦 一郎、堀切克洋

## ● 小説部門 選評

日本全国の高校生が、四十五編の小説を応募してくれました。予選を通過した九作品が、合議、投票を経て六作品となり、最終候補の六作品を対象にして厳正なる選考が行なわれました。結果、最優秀賞には横山若菜さんの「あかる」が、優秀賞には上井莉里佳さんの「此の岸より想う」が選ばれました。おめでとうございます。

「あかる」は、自己と向き合い乗り越えようとする内面描写の丁寧さと切実さとが高く評価されました。「此の岸より想う」は、絵画の絵画性と絵を描く友人の心象風景との関係を通して他者が巧緻な描写により捉えられているところが評価されました。

予選を通過した九作品には、いずれも魅力や才気があり、今後の可能性を感じさせる要素がありました。最終的には、その完成度などによって差がついたのですが、受賞しなかった作品にも、間違いなく読者を惹きつける部分があり、その意味では書き手の表現力が認められました。全体として、多くの作品には、「この代の人たちの身近に存在する死やいじめに対する感受性がみてとれました。「あかる」「此の岸より想う」だけではなく、「淡紅色と青藍」と「彼女の痛み」と「残る燕」と「とうし」からも、新しい何かを受けとめる機会になりました。選考過程において、「惜しい」「もう少し掘り下げられていけば」「もう少し読者に開かれていけば」という声がしばしば聞かれたことも記しておきます。既存の概念や制度や感性を壊したり揺るがしたり新しいものを打ち出したりするのは（それをいわゆる大人たちにもわからせるのは）、やはりなかなか厄介なことだ、ということになるのかもしれないと思います。書き続けてほしいと思います。

### 【最優秀賞】

「あかる」 横山若菜

### 【優秀賞】

「此の岸より想う」 上井莉里佳

## 一句単独の部

## 【最優秀賞】

早朝の無音の校舎寒椿

荒井よつば

「椿」は春の季語だが、冬の間から咲き出すことがあるので、それを「寒椿」「冬椿」と呼ぶ。冬に咲く特別な種類ではない。冬の「早朝」、寒気が張り詰めたような「校舎」にはまだ登校する人もなく、ひっそりとしている。その静けさを、「早朝」「無音」「校舎」とやや堅い漢語の響きを、「の」で繋ぐことで表現している。作者はクラブの早朝練習か、あるいは早朝補習などで登校し、校庭に咲く「寒椿」に足を止めたのだろう。素朴な赤い藪椿が見えるようだ。さまざまな活動が始まる前の「校舎」の静寂を捉えたことで、早朝の空気に清潔感が感じられる。(井上)

寒椿は晩冬の季語。部活の朝練か、受験のためか、まだ寒さの残る早朝に一人校舎に来てたたくむ〈私〉の心境に、鮮やかな寒椿の花が取り合わせられている。まず、冬の朝の冷たい空気の張り詰めた感じが、まだ人の気配もない早朝から学校に来て、やがて訪れる大事な一瞬に向けた準備に打ち込もうとする〈私〉の一生懸命さと、少しく緊張した心持ちによく見合っている。ここでは時間設定を「早朝」とし、校舎を「無音」としたことがよく利いている。そして、そうした張り詰めた緊張感がありながらも清々しい様子と、輪郭のくつきりとした寒椿の花のたたくまいとがよく響き合う。季語「寒椿」をうまく生かしただけでなく、季語以外の一つ一つの言葉の働きにも意識の行き届いた句作りを高く評価したい。(三浦)

武蔵野大学の校内にも山茶花や茶の花、そして冬椿の花が咲きます。冬に咲く花はそう多くはありませんから、朝晩はさしずめ街灯のようです。冷たさを帯びながら開く花はしつとりとあたたかく、そんな寒椿の存在を、誰よりも早く学校に到着したことで、独り占めしている幸福感。きつと手も冷たく、しんと静まり返っている空気は、地方や時期によってはかなり厳しいものはずです。それでも寒椿が咲くように、ひとり到着することによって、学校の一日がゆつくりと始まります。そのとき寒椿は、ひっそりとたたずむ作者自身とも重なり合うのでしょうか。(堀切)

## 【優秀賞】

のりこんでタクシーいっぱいゆやけ

武藤龍之介

「タクシー」という小さな空間に身を押し込んだことで、溢れんばかりの「ゆやけ」に気がついたのだろう。「のりこんで」という上五の表現に勢いがあるって、複数の人がようやく掴まえた「タクシー」に、賑やかに乗ったような場面が想像される。そこには夏の夕焼けがもたらすまばゆいオレンジ色の世界があったのだ。「タクシー」以外を平仮名表記にした工夫も効果的だが、そういう意図を感じさせないほどに作者の驚きが自然だ。(井上)

「ゆやけ(夕焼け)」は一年中見られるものだが、特に夏のそれが壮大で美しいことから夏の季語とされる。夏の夕暮れ時に、帰宅を急ぐためかタクシーに乗り込む。その車内が夕日で赤く美し

く照らされる様子を、「タクシーいっぱいゆやけ」という表現で見事に切り取ったところがこの句の手柄であろう。タクシーに乗り込むという状況設定から、車内という狭く限られた空間を舞台として、その中を夕日の赤い光がいっぱいに満たすという印象的な場面を作り上げることに成功している。夕焼けの美しさや趣をどう表現するかという観点で見たととき、日常風景の中からの切り取り方が独特で優れた句である。(三浦)

高校生がみずからタクシーに乗り込むことは少ないでしょう。だからこそ、タクシーに乗ること自体が、とても鮮やかな体験として描かれていることに驚きつつ、納得もしました。どんなタクシーなのでしょう。部活の大会で敗北したあともかもしれません。どこか遠い地に旅をしているのかもしれない。親戚の誰かが亡くなったのかもしれない。ともかくもフロントガラスから溢れんばかりの「夕焼」は、ただそこに夕焼があつた、というよりは、感情が溢れ出している(いま)を象徴しているような手触りがある一句です。十七音を「いっぱい」に使いながら、漢字を避けることで情感を醸していることも効果的ですね。(堀切)

#### 【佳作】

秋蝶や恋文綴る如く揺る 伊葉小夏

恋文すなわちラブレター。スマホで連絡の多くを済ませることになっても、やはり手書きの喜びは細々と生き残るのだと思います。書いては消し、書いては消し……そんな迷いやためらいを「揺る」と捉えたのでしょうか。秋の蝶は、夏蝶と比べれば、穏やかな日差しに溶けるような官能性があります。「蝶が揺れる」という表現は、少し改善の余地があるかもしれませんが、「秋」が生きていることには間違いありません。(堀切)

#### 【佳作】

青い空一筋の線銀やんま 今野花南

銀ヤンマを含めて、蜻蛉は秋の季語。秋晴れの空高く、銀ヤンマが糸を引くようにまっすぐ飛んでいく姿を素直に句にしている、その爽やかさと、表現の素直さに好感を持てる。ただし、句の初五、中七、下五がいずれも名詞で区切れ、音調としてはぶつ切れになっているのが惜しい。中七「一筋の線」としたところになお工夫の余地があるだろう。(三浦)

#### 【佳作】

手を振った君の最後の夏服かな 穂田進太郎

「手を振った君」が「夏服」姿であったことで、清々しく軽やかな「君」が想像される。それが「最後」であることは、その時にわかっていたことなのか、それとも結果として「最後」になったのか、ドラマ性を含んでいることはいっそう、「手」を振る「君」が切ないものに見える。「夏服かな」は字余りだが、「笑顔」などと詠まなかったことでこの句は成立した。(井上)

【佳作】

春疾風秘めし高鳴り乗せにけり

関口双葉

「春疾風」は、春の変わりやすい気候がもたらす嵐のこと。始まりの季節である春に、期待で高鳴る気持ちを詠むだけであればありふれた句だが、そこに何か波乱を思わせる「春疾風」を取り合わせたことで凡庸さを脱している。期待する気持ちと同じか、それ以上に大きな不安を抱えて「春疾風」に吹かれる（私）の姿が句から思い描かれる。ただし思いを秘めているのであれば、それが風に乗るのはやや不自然。たとえば、抑えきれずに溢れる思いとして「高鳴り」を表現することもできただろう。（三浦）

【佳作】

カラフルな遊具を泣かす花の雨

稲垣優一朗

公園の遊具はピカソの絵のように原色があしらわれていることがありますね。実際に、塗りたての塗料に雨が降ってしまい、「泣く」ように滴っているのでしょうか。冬の雨ではいかにも寒々しい光景ですが、「花の雨」つまり桜の時期に降るあたたかな雨であるところに、ユーモアが生まれます。桜は、ある種の淋しさを想起させる花でもあります。この句はそうした前提をもとに面白い場面を切り取っているというわけですね。（堀切）

【佳作】

夏日影ステンドグラスの部屋の窓

関口菜々子

「窓」に嵌め込まれた「ステンドグラス」を通した光は、部屋に美しい彩りをもたらす。作者はこの「窓」をどこで見ているのだろうか。「夏日影」とあるから、窓の外の日影に立って「ステンドグラス」を眺めているのかもしれない。教会の「ステンドグラス」はよく詠まれるが、この句は単なる「部屋」にしたことで、夏の日影の「ステンドグラス」そのものが涼しげなものとして見える。（井上）

【佳作】

天の川十指ほどけるマリア像

宇都宮駿介

「天の川」は七夕の故事から秋の季語となるが、単に夜空の景としても詠まれる。この句の天の川は、手を組んで祈るマリア像の祈りの先にある銀河としてイメージできる。マリア像の十指がほどけるのは、祈りが天に届いたと感じられたということであろう。その祈りの内実を表現として詰め切れていないのが惜しいが、長く続くコロナ禍、ウクライナでの戦禍など、苦痛と悲しみに満ちた現実状況においてこの句を見れば、マリア像を通じて「祈る」という行為を象徴的に表現したことに、今ならではの切実さが感じられてよい。（三浦）

【佳作】

百日紅が褪せり十七の夏 小林菜々美

「百日紅」は盛夏に、枝々に小さな花をびっしりと付ける。七月頃から九月末まで長く咲き続けることが漢字名の由来。その百日紅の花がようやく色あせていく様子に、十七才の（私）の夏の終わりを重ねる。一つ一つは小さいながらもたくさんの花が花開いた季節がようやく過ぎ去ろうとする、そのもの悲しさと、夏の終わりに（私）が感じる物憂さが見合っている。十七才の夏ということと、（私）のうちにある将来への漠然とした不安や焦りなども、色あせていく百日紅にある翳りとして読み取れようか。なお、「褪せり」はひとまず「いろあせり」と読んだが、単に「あせり」と読むのであれば不自然な字足らずで、音調も整わず、不可。素直に「色褪せり」とする方がよい。（三浦）

【佳作】

スコールに打たれる蛹応援す 青葉董珠

この「蛹」が何の「蛹」なのかは不明だが、「スコール」は熱帯地方の驟雨を言うので、熱帯特有の風土に生まれて羽化の時を迎えた蝶や蛾などの「蛹」がイメージされる。長く降り続く雨ではなく、突然降り出してもすぐ止むとわかっているからこそ「耐えよ」と「応援」したくなるのだろう。俳句としては「応援す」と言わず、雨に打たれる様子を描写するほうがさらに印象的な一句になる。読者が「応援」したくなるように詠む、ということだ。（井上）

【佳作】

風船の色に八百屋を思ひ出す 安和音南

風船の色は赤、黄、青などとやはりカラフル。しかし風船を見て、八百屋に並ぶ果物を思い浮かべるなんて、豊かで面白い発想だなあと思います。多くの人は、仮にお腹が空いていたとしても、風船が林檎に見えたりバナナに見えたりはしないでしょう。でも「思い出す」といわれると、そういうことがひよっとしたらあるかもしれない、という空想におのずといざなわれます。リアリティというよりは、遊び心のある一句ですね。（堀切）

## 複数句の部

### 【最優秀賞】

かげろう

神尾雛子

「辛夷」から始まり、「薔薇」「桜（薬降る）」「草いきれ」「にらの花」「金木犀」、そして再び「桜（前線）」と季節の植物を配して、二十句で一年をまとめた秀作である。

第一句の「呼び鈴を押して見上げる辛夷かな」は、作品の冒頭に置くにふさわしく、「呼び鈴」の作り出す間合いが、読者を作品世界へとスムーズに導く。第四句、「桜薬降りて一昨日より赤い」には写生の眼の確かさがある。第六句では、「明後日」という時を心待ちにする心情が、吊された「浴衣」という「もの」によって捉えられている。「網戸」の「向こう」という距離感も絶妙。第十三句、「青虫」は風を探るように頭を持ち上げているのか、「肌」が「ぬくぬくと風を帯び」ているという描写は個性的だ。「マスク」を外して楽しむ「金木犀」の香りはよく詠まれているが、それが「記憶」を呼び覚ますという捉え方に注目した。コロナ禍によって切断された日常が思われるからだ。第十五句の「月光」の「包み込む」「工事現場」は多くの人が立ち働くエネルギーな昼の顔とは別の幻想的な世界。続く「富士の雪」を見ようと「つま先」に込められた力には、対象に向かう姿勢がよく出ていて抽んでている。そして、第十九句の「寒の雨」降る戸外へ追われる「鬼」も心に残った。

全体に題材にも表現にも無理がなく、一句一句丁寧に詠まれている。そこに作者らしい視点や新鮮さもあつて心に残る作品だった。（井上）

第一句「呼び鈴を」で春を詠み、以下、夏、冬を経て、「明け方に」句で再び春を迎える季節の巡りを意識した構成になっている。やや夏、秋に偏りはあるものの、多彩な季語を詠もうとした意欲をまずは買いたい。「呼び鈴を」句は、ふと見上げた先にあつた辛夷の花に春を感じたことを詠む。訪問先の呼び鈴を押した後、相手がドアを開けてくれるまでに生じるちよつとした間に、ふと目が留まったものに春を感じるところに巧まざるリアリティがあつてよい。その他、散り落ちた後の桜の花の薬の微妙な色の変化に目を留める「桜薬降りて」句、むっちりとした太った青虫の質感をうまく捉えた「青虫の」句、節分で鬼を追いやった先に広がる、外気と冬の雨の冷たさを捉えた「鬼を追う」句など、季語を生かしながら、ものごとを観察し捉える目の確かさを思わせる句作りに特徴がある。また、夜間に無人になった工事現場の月光に照らされた静謐な一枚の絵のように美しく捉えた「月光の」句や、どこよりも早い富士山頂の初雪をつま先立って見ようとすると「私の心踊りを微笑ましく詠んだ」「つま先で」句など、異なる詠みぶりの句もあつて作句に多彩さを感じさせる。テーマの由来となる「サイレンに」句は、死を思わせる不穏な雰囲気独特だが、「蜉蝣の沈みゆく」という表現が観念的に終わっているのが惜しい。総じて、俳句を作るということに正面からしっかりと向き合っていることのわかる好句が多く、最優秀賞に推す。（三浦）

二十句は素材的にもリズム的にも緩急がついていて、この作者の作る句をもっと読みたいと感じる連作でした。日常のなかにある花や小動物をしっかりと体で感じているし、それが感覚の言葉となつて、読み手の身体をグルーブさせます。「つま先で立って見ている富士の雪」の「つま先」。「いがぐりを覗いては血を舐めにけり」の「覗いて」。「呼び鈴を押して見上げる辛夷かな」の「押して見上げる」。「床に寝て見えるとかげの目線かな」の「床に寝て」と「とかげの目線」。それほど大きく飛び跳ねたり、恐ろしく小さくなったりはしないのですが、それでもちよつとだけ日常

の外に、背伸びをしたり低くかんだりしながら、生活を詩に変貌させてゆく手つきは、今年度の最優秀賞に値すると考えました。「鬼を追う戸口の外や寒の雨」は、小寒から大寒を経て立春を迎える直前のイベントが「豆撒（追儼）」ですから、ある意味では、季語のテリトリーのなかに収まっているわけですが、しかし鬼を追ってもなおまだ外は「寒の雨」が降っているというところには、やはり作者の体が介在しているのだと思います。「薔薇の花落ちて五割の雨予報」「明後日の浴衣あり網戸の向こう」などについても似たようなことが言えるかなと思います。いずれもオリジナリティな句でしょう。（堀切）

#### 【複数句の部 講評】

複数句の部に十編の応募があったことを喜びたい。高校生を対象とする俳句コンクールはいろいろあるが、複数で構成された作品を募集しているのは武蔵野大学だけではないかと思う。このコンクールに挑むことで、一句単独とは別の俳句の面白さ、魅力に気付いてもらえたら嬉しいし、想像力も鍛えられると思う。

（三浦）